

令和6年度
厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業）
分担研究報告書

ろう・難聴児、ろう重複障害児のコミュニケーションとその支援のあり方の検討：

「子どもの様子を観察し、興味に合わせた支援」という観点

研究分担者 松崎丈 宮城教育大学

研究分担者 高嶋由布子 国立障害者リハビリテーションセンター研究所

研究協力者 武田太一 特定非営利活動法人つくし・聴覚・ろう重複センター

研究要旨

本研究は、ろう・重複障害児に対する支援において、子どもの行動を単なる問題行動や非言語行動としてではなく、意味ある「信号」として捉える視点の重要性を明らかにしたものである。特に、子どもが意図せず発する行動（自成信号）を支援者が丁寧に受信し、共感的に応じることによって、やがて意図的な伝達（構成信号）へと発展していく過程を理論と実践の両面から検討した。また、手話を言語学的枠組みに限定せず、多様な信号系の一つとして捉え直し、子どもの理解のしかたに応じて柔軟に支援することの意義を講演会・ディスカッションを通じて整理した。今後の支援者養成においては、自成信号を読み取る実践的能力を育成する研修や実習の充実が求められる。

A. 研究目的

本研究は、ろう・重複障害の子どもたちへの支援において必要となる知見を整理し、支援者が備えるべき視点と知識を明確にすることを目的とする。子どもに対して何かを教え込む以前に、子どもが発している自発的な信号（自成信号）を受信し、意味あるものとして読み取って関わることの重要性を、これまでの実践を基礎に講演会でのディスカッションを通じて明らかにする。

B. 研究方法

これまでの実践から得られた知見を整理し、支援者が理解すべき理論的枠組みとして文献と経験をもとにまとめた。また、放課後等デイサービスで長年にわたりろう・重

複児の支援に携わっている武田氏をコメンテーターに迎えた講演会を実施し、対話とディスカッションを通じて現場視点を共有・深掘りした。

（倫理面への配慮）

講演会はオンライン配信で行い、わかりやすいように以前の調査のビデオを示しながら説明した。このビデオは公開範囲の許可を得ており、共有は講演会限りとし、録画は非公開、参加者にも録画をしないよう呼びかけた。

C. 研究結果

本研究では、支援において「教える」以前に「読み取る」ことの重要性が強調された。

特に、子どもの行動を単なる問題行動や非言語行動としてではなく、その場の文脈や外界との調整の結果として理解する視点が求められる。子どもの発する信号を「自成信号系」として捉え、それを受け取り返すことで「構成信号系」へと発展させる可能性が生まれる。

また、手話も単なる言語的表現としてではなく、多様な信号系の一つとして再検討される必要がある。象徴的か非象徴的か、形態質的か分子合成的かという分類に基づき、子どもの「わかりかた」に応じて適切な表現手段を選ぶことが大切である。講演会と実践事例の共有により、こうした視点を支援者が実際の場面で応用するための土台が提示された。

D. 考察

1. 行動を「コミュニケーションの文脈」で捉える視点

支援者は、子どもの行動のみを観察対象とする傾向があるように思われる。この観察では、子どもの行動を突発的なものであったり問題行動とみなしたり意味がわからないものと捉えることが少なくない。行動の発現について次のような考え方があある。行動とは「生活体の状態変化の型（パターン）特性（梅津，1976）」であり、我々の行動が発現するのは、常に変化する自分の外界の状況に対処・調整するためであるという。そうすると突発的な行動も問題行動もその時々外界の状況に対処（調整）した結果としての現れと捉えることができる。発現する行動にはすべて意味があるということになる。したがって、コミュニケーションの文脈では、その状況に支援者自身の行動

も含まれることも念頭に置く必要がある。

2. 行動を「自成信号系—構成信号系」の枠組みで捉える視点

子どもの行動を「非言語—言語」の枠組みで分類・観察する傾向がある。しかしそれでは、ろう重複障害の子どもだけでなく、乳幼児期におけるろうのある子どもの行動を捉える上で非常に大きな問題が起こりうる。例えば、赤ちゃんの泣く行動を例に考えてみよう。生まれたばかりの赤ちゃんは、体内あるいは外界の何らかの条件で不快な状態（空腹になる、眠れない、気分が悪いなど）になると泣く行動を発現する。親は、赤ちゃんが泣く行動をコトバとして受信する。お腹空いたのかな、おむつかな？眠れないのかな？と抱っこしたりあやしたりして係わる。すると、赤ちゃんは、泣けば親が自分のところにやってくることに気づくようになる。そうして意図的に親を呼ぶために泣く行動が発現する。この二つの泣く行動は、「非言語—言語」の枠組みで見れば、両方とも非言語行動として一括りにされてしまう。それでは赤ちゃんの行動の変化や発達を見えなくなる。そこで、最初の泣く行動のように意図的に伝えていないが結果として他者にとってコトバになっているもの（「自成信号系（梅津八三，1978）」と、意図的に泣く行動のように自分が他者に意図的に伝えるためにあえて作ったコトバ（「構成信号系（梅津八三，1978）」）の枠組みで捉えてみるが必要になる。

ここでろう重複障害の子どもの1事例を紹介しよう。聴覚障害と知的障害を併せ有する幼児で、親や教員に意図的に何かを伝えるような行動はまだ発現していなかった。

ある時、コップタワーを自分で積んでは崩し、また積む活動に没頭していた。積んで完成した直後、幼児はコップタワーを凝視したまま、コップタワーの高さや形状を捉えたような手指の動きをした。それが何度かあった。親や教員には視線を向けていなかった。意図的に伝えるものではないらしく、親や教員もそうした動きには気づいていなかった。そこで、私は、この自成信号があることを伝え、あなたのコトバを受け止めたよ、完成できてうれしいんだよねという気持ちを事例と共有するために、コップタワーが完成したタイミングにあわせてそのコトバを使って共感する係わりを、親や教員に提案した。その後、家でも親がそのように係わっているうちに、コップタワーが完成した瞬間に目を合わせて笑う場面が生まれた。やがて幼児から親にコップタワーどこ？と伝えるためにその手指の動きを構成信号として発信するようになった。

自成信号系は、いわゆる言語も含めてあらゆる行動の萌芽であり、丁寧に探り、コミュニケーションの文脈へすくうことで、やがて構成信号系に至る可能性がある。つまり、自成信号系は自然に構成信号系に変わるのではなく、自成信号系を受信し、適時適度にコミュニケーションの文脈へ取り入れる他者の係わりがあって構成信号系に至るわけである。特にコミュニケーションの初期段階においては、子どもと他者が、興味関心を共有する事物や話題へ注意を向けるという共同注意 (Bruner, 1975) が両者のコミュニケーションを形成・展開するうえで重要となる。子どものその時々々の注意と興味から、「コミュニケーションの文脈」で子どもが何にもっとも焦点化しているのかを

見極め、柔軟に応じる (土谷, 2016) 必要があり、見極めるために支援者が子どもの自成信号系を受信することが鍵となる。

3. 手話を使う行動を言語学的枠組みだけでなく「信号系」の枠組みで捉え直す視点

構成信号系である手話言語には、音声言語と同様に、わかりやすい信号系とわかりにくい信号系がある。ろう重複障害の子ども一人ひとりのわかりかた (理解のしかた) にあわせてどのような手話を使うのかを吟味しておく必要があることに気づかされることがある。

特に、構成信号系は、伝えようとする何かと類似しているものと、類似していないものに分かれる。前者は象徴的信号系という。前述の事例で構成信号となったコップタワーに類似した/コップタワー/が該当する。また、手話単語の中にも/飲む/のように飲む動作に類似した表現もある。それに対し、後者は非象徴的信号系という。この信号系はさらに形態質的信号系と分子合成的信号系の2つに分かれる。形態質的信号系は、一塊からなる信号で事物・事象との対応さえできれば良いものである。手話の例でいうと、/終わり/、/休む/などがある。分子合成的信号系は、有限個の要素を組み合わせて様々な概念を作ることができる。手話の例では、形態質的信号系であった/行く/に、起点と終点といった新たな要素を加えて/行く/の動く方向も変えることで/家→行く→一駅/ (家から駅まで行く) といった概念を作り出すものがある。なお、手話の CL (Classifire) にも象徴的信号系としての CL (主に操作 CL)、非象徴的信号系としての CL (主に実体 CL や Sass) があるため、これ

らもその時々の子どものわかりかたや状況に応じて適切に使う必要がある。

日本手話を使うろう者同士の会話では、分子合成的信号系としての手話を主に使うが、それは乳幼児期から様々な生活経験を通して蓄積された個々のわかりかたやろう文化に基づいている。このようにコミュニケーションとは、人のその時々わかりかたに基づいて各種信号系が使われるものである。したがって、教員は、ろう者が使う手話(特に非象徴的信号系としての手話)のように何らかの“共通語”の方が皆にわかりやすいからと考えてそれを子どもに使わせようとしなことが望ましい。むしろ、その子どもが現に使っている信号や、その子どもに分かる信号(象徴的信号系としての手話信号やコップタワーのように子どもの自成信号をよりどころに作った独自の手指信号など)を最優先する(松田, 1997)。この信号をよりどころにして、子どもにとって「通じ合えた!」「もっとこの人とコミュニケーションしたい!」という思いを伴って共感・共有の経験を広げることが大事と考える。そうすることでその子どもが使う信号系としての手話を使う行動は一層拡大されるものである。

E. 結論

ろう・難聴児、とくに重複障害をもつろう・難聴児の支援において、子どもが発している自発的な信号(自成信号)を受け止め、そこに意味を見出して応答することが、支援者の基本姿勢として重要であることを確認した。手話を含む多様な信号系を柔軟に捉え、子どもそれぞれの「わかりかた」に基づいた支援を実践していく必要がある。

今後は、自成信号を受け止める経験を支援者が実際に体験できるような研修・実習の場を設け、より実践的に知見を活用できるような支援者養成が求められる。

文献

- Bruner, J. S. (1975) From communication to language. *Cognition*, 3, 255-287.
- 松田直 (1997) 障害の重い子どもの教育とコミュニケーション-子どもの意思の表出と係わり手のあり方-. 重複障害児の意思表出と教育環境に関する研究. 国立特殊教育総合研究所, 5-12.
- 土谷良巳 (2016) 障害の重い子どもとの共同活動における共同性と相互性-行動体制間(相互)調整の観点からの考察-. 上越教育大学特別支援教育実践研究センター紀要, 22, 9-18.
- 梅津八三 (1976) 心理学的行動図. 重複障害教育研究所研究紀要, 創刊号.
- 梅津八三(1978)行動体制と信号系. 重複障害教育研究所講演録.

F. 研究発表

1. 論文発表
なし
2. 学会発表
なし

G. 知的財産権の出願・登録状況

なし